
trip in the world ~ Before the days ~

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t r i p i n t h e w o r l d ~ B e f o r e t h e
d a y s ~

【Nコード】

N 5 7 6 7 X

【作者名】

R A N

【あらすじ】

18禁作品の「t r i p i n t h e w o r l d」の学生時代のジェイルとアイリスを描いています。

こちらは18禁要素はありません。

お互いに素直になれない性格だけれど、だんだんと通じ合っていく。学生という若い時だったからこそ、感じられたその気持ち。

Blue

俺には、一生縁のない奴だと思っていた。

接点なんか、あの女が主席で、俺が次点だった。それだけだ。

あいつはおまけに外見がきれいで、性格も人好きのするもので、男子生徒の憧れの的だった。

そういえば、ルームメイト達が集まって、彼女で卑猥な話をしていたものだ。

あの女も、男にそういう想像をさせるような、体の線を出した格好をしているのもいけない。

だが、それが女達の嫉妬をかったためか、結局あの女の周りに友人らしきものはいなかった。

俺はと言えば、他人に愛想をふるような性格でもなかったから、もちろん大学でも一人だった。

大学には勉強をしに来てるんだ。他に何かあるという。

性格にはやや難がある教授達だったが、彼らの理論はともおもしろかった。

学生だから、時間もあつた。

一日中図書館にこもって本を読み漁ったりしていた。

時間があつたから、他の生徒がレポートで苦戦していたりしている時は、助けてやった。

気に入らないヤツは、担当教授の神経を逆撫でしそうなポイントを細かくついたレポートを出して、わざと落としたこともあつたが、助ければ、いくらでも後で脅して食事を奢らせたり、本を買わせたりできたし、とりあえず社会的地位が安定する。

この社会というのはおかしなもので、一人になっているものを見つけると、皆何かとそれに問題をつけたがる。

だから、そういうのは面倒だったので、俺はそういうことをして

ごまかしていた。

全ては俺の快適な勉学環境のためである。

そうして過ごしていたある日のことだった。

確か、夏休みが明けて、学校が始まった日の講義だった。

「お隣、空いてる？」

授業の始まる前だった。

別に人気のある授業でもなかったから、席は他にも空いていた。
何でよりにもよって俺の隣などに、と訝って、俺は声をかけた人物を見た。

すると、例の女だった。

「……空いているが……」

「それじゃあ、失礼します」

女は俺の隣に座った。

どうしようもないので、俺はまた黙って本の続きを読むことにした。

「何の本を読んですの？」

女が話しかけてきた。

先ほども言ったように、人気のない授業だ。周りにはあまり人がいない。

恐らく、俺に話しかけたのだろう。

「……………それが、お前に何の関係がある」

何だ、この女は。訳がわからない。それが俺の正直な感想だ。

「私、よくあなたを図書館で見かけるの。そして、いつも私の一つ

前に私の見たい本を借りていつてしまうのよね。私、今その本を待ってるの」

女は、俺の持っている本を指差して、そう言った。

「残念ながら、まだ半分までしか読んでいない。演習も解けていないし、今週は無理だな。他の本でも読んでいろ」

「他の本を読んでいる間に、すれ違ったら嫌なのよ。それがとても読みたいの。あなただって、その本がおもしろいから、読んでいるんでしょ？」

「そうだが……俺はこれを読んで、教授に質問したいことがあるんだ。急かされても困る」

「私も、教授にレポートを提出して、ご意見をうかがいたいのによ」いけない。これではらちが明かない。押し問答は苦手だ。

「……………俺に、どうして欲しいんだ」

「読み終わって図書館に返したら、ここにすぐ連絡をちょうだい」

そう言うのと、女は俺の方に小さな紙切れを押した。

本から目を離し、それを受け取ると、数字の羅列があつた。

電話番号じゃないか。

こんなの渡してどういうつもりだ、と聞こうとしたが、ちょうどよく教授が来てしまったので、話はそこで中断するしかなかった。

授業が終わると、女は俺が声をかける前に、さっさと教室を出て行ってしまった。

結局、これは、俺が女に電話をしないといけない、ということか。

俺は、とりあえず本を読むことにした。

いつもは、時間があるのでゆっくりやっていたのだが、妙に急かされている気分になり、つい夜遅くまでやってしまった。

そして、何とか日曜になる前に仕上げる事ができたので、土曜の昼、女に電話を試みた。

思えば、誰かに電話をするなんて久しぶりだ。

『はい』

聞き覚えのある声が出た。恐らく、あの女だろう。

「あ……本を読み終わったから、図書館に返しておいた。読みたければ早く借りに行け」

俺は電話がどうも苦手だったので、早く切りたかった。

だから、用件だけ伝えて、俺は電話を切ろうとした。

『あ、あの……！』

だが、女はまだ俺に何か用があるらしい。

「なんだ」

『あなたがあの本に対して抱いた感想を聞きたいの。今日、空いてる？』

この女は、一体何がしたいんだ？

俺は少し苛立った。俺は、理由のわからないものが一番嫌いだからだ。

「何のために、俺はお前に会わなければならないんだ。もしくは、お前が俺に会うことで得られるメリットを言え。理由のないことはしない」

『あなたの意見を参考にさせてほしいの。私のメリットはそれ。だめかしら？』

女は淀みなく言った。

だいたいの方は、俺のこういう態度が気に入らないらしい。だが、この女は、そういう奴らとはどこか違うと思った。

「気に入った。俺の授業は16時からだから、その前ならいいぞ」

『そう、偶然ね。私も16時からなの。それじゃあ、大学内のカフェでいいかしら？』

ここから、俺とその女、アイリスは、話すようになった。

「何でお前がここにいるんだ」

「静かだから、勉強しやすくて」

アイリスは、なぜか俺の勉強しているすぐ横にいた。

しかもここは俺の部屋だ。

「図書館があるだろう」

「あそこは人がいるし、広すぎて落ち着かないの」

「ここは俺の部屋だ。俺がいるんだぞ。自分の部屋にでも行け」

「あなたはいいの。今、ルームメイトが部屋貸しきっちゃってるのよ。その間だけ」

貸切とは、もちろん女が男を部屋に連れ込んで、ということである。

「……………ここは男子寮だ。女子は入ってはいけないことになってる」

その話の後に、こんなことを言う俺も、いよいよやきが回ったと思った。

「男子寮に女子が入ったりすることなんてよくあるじゃない。またその逆もしかり。バレなきゃいいのよ」

アイリスもそう思ったのか、笑顔でそう言った。

「……………」

俺は何も言い返せなくなり、しょうがなく、自分の作業に戻ることにした。

今まで、自分のプライベートな空間に女性がいたことがなかったので、不思議な感じがしたのは、確かだった。

「何で、お前が俺と一緒にいるんだ。一緒にいてくれそうなヤツなんかいっぱいいるだろ」

いまいち集中できず、気分をまぎらわすために、俺はそう言っていた。

俺から話すことは初めてだったので、アイリスは少し驚いたような顔をしていたが、また笑顔で答えた。

だが、それはどこか影のある笑顔だった。

「彼らじゃ、ダメなの。あなたなら、お友達になれそうな気がした

のよ」

そう言つと、ふと俺の後ろに近づく気配がした。

振り向こうとすると、肩に手が置かれた。

アイリスが、すぐ近くにいた。

「だつて、たぶん私があなたのやつているこの問題の答えを聞いたら、途端に口を閉じてしまうもの」

そう言いながら、アイリスは俺の手元にある本を覗き込んだ。

彼女のほのかな温もりと息遣い、そして、何となく落ち着く優しい匂いを感じた。

「……頭の良いお嬢さんには、所詮世の男どもは馬鹿にしか見えない、ということか」

俺は、動揺した気持ちを隠すように、ついそんな皮肉を言つてしまった。

それでも彼女は笑っていたのだから、驚いたものだ。

そろそろ部屋の貸切もとけただろうと、アイリスが部屋を出てから、俺は作業の続きをしていたのだが、資料が欲しくなった。

まだ今の時間なら図書館は開いてるはずだ。行つてこよう。

そう思い、俺が部屋を出たところ、いきなり声をかけられた。

「おい」

普段あまり声をかけられないような、体格のいいヤツだった。

たぶん、不良グループのリーダーか、スポーツ部のキャプテンで、自分はハンサムだと勘違いしてそんな輩だ。

俺は、とりあえず男の呼び声に、その場に立ち止まって、男を見た。

すると、男は眼光を鋭くして、俺に近づいてきた。

そして、そのでかい顔を近づけて、声を低くして言った。

「何でお前の所に彼女が来てるんだ」

「知るか」

俺がそのぐらいのことで怯えんでも思っただろうか。

俺も随分なめられたものだ。

まあ、普段していることがしていることだから、しょうがないのかもしれないが。

「何だと！ てめえ！」

そう言くと、男は俺を殴ろうとした。あまりに短絡的だ。

だが、短絡的な方が行動が読みやすくて助かる。

俺は、男の攻撃を避けて、その手をつかみ、そのまま肩から流して、倒しこんだ。

俺に力はないが、男には力がありそうだった。

自分自身の力がそのまま来たのだから、相当こたえたようだ。

騒ぎを聞きつけて、少し野次馬ができていた。

男はさすがに恥ずかしくなったらしい。

「くそ、今日はこのぐらいにしといてやるさ」

もっと気のきいた台詞は言えないのか、と思ってしまった。

「ジェイル」

授業前に、アイリスが俺の隣に来て、声をかけた。

「あなた、昨日……」

「お前が俺に関わると、いらない因縁をつけられる。俺にもう近づかないでくれ」

アイリスが何か言う前に、俺は彼女の声にかぶせるように言った。

アイリスは、俺の言葉に、何も言わなかった。

彼女となら、関係が築けるかもしれない、などと甘い夢を見たのが間違いだった。

俺としたことが。

彼女は、やはり俺とは違う世界にいる人物だ。

俺の側にいるべきではない。彼女は、孤独とは無縁だ。

あれから、アイリスは俺に声をかけてこなくなった。
また平和な時間がおとずれたのだ。

思えば、アイリスがいた時間は、思うように勉強に集中できなかったし、妙に急かされていたように思うから、これからはまたゆっくりと本を読むことにしよう。

そう、このどこか空虚な気持ちは、少しの間忙しかったから、それが急に終わって、気が抜けてるからだ。
少しすれば、なおる。

そう思っていたが、虚ろな気持ちは、だんだんと不安や苛立ちに変わった。

どこか落ち着かない。

彼女は、一体俺に何の種を落としていったのだろう。

この気持ちは、一体何なのだろう。

彼女に会えば、解決するのか……。

俺は思わず電話を手を取っていた。

すると、電話が鳴り出した。

俺の電話が鳴るなど、そう滅多にない。

ルームメイトがいたので、俺は慌てて部屋から出て、廊下の影になっっている部分に入った。

「はい」

『アイリスだけど』

「何だ。俺に近づくなと、言ったはずだ」

気持ちとは裏腹な言葉が出る。だが、一度言った言葉は取り消せない。

それが俺の信条でもある。

『近づくな、とは言っても、話すな、とは言っていないじゃない』

アイリスの声が何だか嬉しそうに聞こえた。

「は？」

『電話なら、あなたに近づいたことには、ならないでしょ？』

「あのな、俺は……」

俺が言おうとした時、近くにあった窓に定期的に物が当たる音がした。

『窓から下を見てみて』

アイリスが言うので、俺はその窓から下を見た。

『これも、近づいたことには、ならないでしょ？』

窓の下には、アイリスがいた。

ここは二階だ。アイリスは俺の方を見上げて、手を軽く振っていた。

俺は思わず、笑ってしまった。

「馬鹿か、お前は」

本当に、馬鹿な女だ。せっかく俺が離れてやったというのに。自分から俺に近づいてくるなんて。

そして、不覚だ。人前で笑ったことなんかなかったのに。

『あ、笑った顔、初めて見た』

アイリスもそう嬉しそうに言っていた。窓の下の彼女も、笑顔だった。

RAN

2007/5/22

B e f o r e t h e d a y s

男なんか、皆馬鹿ばかり。

ほとほと嫌気が差していた。

だけど、気になる人がいた。

このあいだの授業で、先生の気紛れで出された難問を、唯一、しかも簡単に解いてしまった男がいた。

周りが騒いでいるなかで、その男がどうやら次席であつたことがわかった。

私は、成績で全てはかれるとは思っていない。

だから、成績などは正直どうでもよかった。

ただ、あの人なら、わかってもらえそうな気がした。対等になれ
そくな気がした。

だから、この次の授業では、彼に話しかけてみようと思った。

c o n t i n u e t o ” B l u e ” . . .

R A N * * * 2 0 0 7 / 9 / 5 * * *

w a k i n g a f t e r s l e e p i n g 【1】

「そういえばね、ジエイルが一度だけちゃんと笑ったことがあるの」
アイリスはぽつりと言った。

「？ 出会いの時の話は聞いたけど？」

「ううん。だってそれは窓ごしだし、すごい離れてたから、正直言うとなんと確認はしてないの。電話の声の雰囲気とかで、何となく思っただけ。でも、ちゃんと笑って話してくれたことがあるのよ。私を初めて名前で呼んでくれたのも、その時だったと思う」

「ほお。それは興味深いお話ですね」

レイラはニヤリと笑って、アイリスを見た。

「そう言うと思った」

アイリスも小さく笑った。悪戯を楽しむように。

「聞きたい。教えて」

「そうね……」

アイリスは少し間を置いて、静かに話し始めた。

教室の中は少しざわついていた。

教壇に立つ教授は、黒板に素早くチョークを走らせている。

課題、の文字が見えた。

教授は黒板いっぱい文字を書ききると、生徒の方に向いた。

「黒板に書いてあるとおりです。適当に2人ずつペアとなって、課題を行ってください。提出期限は次々回の授業時間まで。何人かは授業の中でプレゼンテーションしてもらいますので、リサーチはきちんと行ってください。では、今日はこれで終わりです」

教授の言葉の終わりと同時に、チャイムが鳴った。

教授は教室を後にした後も、教室に残って、どうするか話している生徒が少しいた。

アイリスも、次に授業がなかったもので、誰とペアを組もうか、教室を見回していた。

この授業では残念ながら、知人はおらず、とすると、女子に敵の多いアイリスは女性とは組めない。

なので、適当な男子がいなかったと探していた。

そして、同じように教室を見回していた誰かと目線が合った時、それを遮る声があった。

「アイリス、俺とペア組まないか？」

聞き覚えのある声に、アイリスは思わず眉を寄せてしまった。

声のした方を向けば、まさに想像していた相手だった。

いつもしつこくからんでくる、やたらに体格だけはいい男だった。嫌な印象しかないから、名前も覚えていない。

「ごめんなさい……」

アイリスが言おうとすると

「アイリス」

横から声が入った。

体格のいい男と比べれば、かなり小柄で、むしろアイリスよりも背が低い男、ジェイルだった。

「図書館に、資料を探しに行くぞ」

ジェイルは何か示すように、首を後ろへ小さく振った。

アイリスはそれを笑顔で察した。

「ええ。今行くわ。そういうことなの、ごめんなさい。私ジェイルとペアを組んでいるから、あなたとはペアを組めないわ。それじゃ」

アイリスは男の返事を待たずに、ジェイルの手を引いて、素早く教室から出て行った。

「助かったわ、ジェイル、ありがとう」

教室から離れてしばらくして、アイリスは立ち止まってジェイル

と向かい合った。

「別に。お前が誰の目にもわかるほど、嫌な顔をしていたからな。ちょうど俺もペアの相手を探していたんだ。あれでお前がのつてくなくても構わなかったが、のつてくれて俺も有り難い」

ジェイルは相変わらず表情を動かさずに言う。

「それにしても、やっと名前で呼んでくれたわね」

「そうか？」

「これからも名前で呼んでほしいんだけど。おい、とかお前、とかじゃなくて」

「覚えてたらな」

ジェイルの気のない返事に、アイリスは苦笑いとともに、小さく息をもらした。

「あなたが同じ授業を取っててよかったわ。実は少ししてから同じ授業だつて知っていたのだけれど、あなた、私が隣に座ると嫌そうな顔をするから、一応気を遣って、あまり行かないようにしていたの。でも、これからお互いに知人がいない時は、あなたの隣に座っていいかしら？ そうすると、今回みたいな面倒なこともないし」

アイリスは、話題を変えた。

「俺は誰かに隣にいられるのは嫌だ」

ジェイルは間髪いれずに、アイリスの言葉にそう返した。

「そう……」

アイリスはまた苦笑いを浮かべた。

「だが、後ろなら別に構わない」

そう言うと、ジェイルは歩き出した。

「図書館に行くんだろ。必要なくても、行っておかないと、あいつに見つかつたら面倒だ。こんな課題さつさと終わらせるぞ。俺は来月に×切のある論文もあるんだ」

「ええ。わかつたわ」

アイリスは足取り軽くジェイルの後についた。

しかし、図書館に着いた途端、二人の空気は険悪になった。

「どういうこと、それ」

アイリスは目を据わらせて、ジェイルを見ていた。

「言ったとおりだ。俺が課題をやって、完成したら連絡するから、完成したものを後はお前がチェックして、教授に提出すればいい」

ジェイルはアイリスの低い声音に動じた様子もなく、淡々と答える。

「私を馬鹿にしているの」

アイリスの声にだんだんと怒りの熱が含まれてきていた。

「何を怒っているんだ。俺はいつもこうしてきたから、その方法を提案したまでだ」

ジェイルは逆にアイリスの反応が意外そうだった。

少し無表情が崩れ、動揺の色が見えた。

表情を崩せたのは嬉しいが、今それを喜んでいる気分には、アイリスはなれなかった。

「何それ。あなたおかしいと思わないの。本当は人のやるべきものをやって。それがペアワークだとも言うの」

「人のことなど知らん。俺は課題をこなせばこなすほど、実力がつくし、相手は楽ができると喜ぶ。それで相手が能無しになろうと、俺の知ったことではない。そいつが馬鹿なだけだ。馬鹿なヤツのことなど知らん。だいたい、アダム・スミスも人間は利己主義だと言っている。どんなに他人のために尽くしたとしても、それはいつか自分に返ってくる、自分のためになると思っているからしているのだ。情けは人のためならず、とも言っしな」

「あなた、専攻は化学だったわよね？　いつからそんなに文学的なことや経済的なことを言うようになったの」

アイリスは嫌味たらしく言った。

「アダム・スミスぐらい、学生の一般常識だろう。ことわざも。そういう顔はやめろ」

ジェイルは不愉快そうに眉をひそめた。

「私がこういう風に振舞おうが、あなたには関係ないじゃないの。そうよ。人のことなんて知らないんでしょ？」

「あー、もう、俺は本当にお前が何で怒っているのかわからないんだ。面倒はごめんだ。俺はどうしたらいい。どうしたらお前の気に入るようになるんだ」

ジェイルもアイリスと同様に苛立たしげに声を荒げた。

「それも言われないとわからないの？　どれだけ頭がよくても、社会的能力は全く低いのね。情けない」

「ああ、そうだとも。俺は人と話すことさえ苦手だ。だから教えてくれ！」

アイリスは、ジェイルの大声に、そこでなぜだか妙に冷静な気分になった。

そして、図書館前で繰り広げられていた喧嘩を盗み見る人も増えてきたので、ジェイルの腕をそつと押して、移動する意志を伝えた。ジェイルも、渋々それに従った。

そうして着いたのは、女子寮前の談話室だった。

「とりあえず、ここで落ち着いて話しましょうか。さっきは私も悪かったわ」

「……………ああ」

アイリスが言うと、ジェイルもまだ不機嫌な調子が残っているものの、いつもの無表情に戻り、談話室の空いている席に、アイリスにならって座った。

「とりあえず、私はペアワークっていうのは、二人で協力して資料を探し、構成を組み立てて、結果お互いが納得して完成させて、提出するものだと思うてるの。だから、もし譲ってもらえるなら、私のやり方でいってもいいかしら？」

「わかった。その場合、役割分担を決めるべきではないのか」

「さすが察しはいいわね。そう、だからまず……………」

談話室で、二人の話は進んでいった。

それで、とりあえずこの日は解散となった。

そして、その後も、談話室や図書館にこもり、二人で資料を探したり、構成の相談の作業を進めていた。

骨組みは終わり、ついに課題のまとめとなるレポートの作成となった。

「さすがに文章を打ち込むのは一人だろう。それなら、構成もほぼできているし、どちらかがその役割を負い、できたらまた確認をすればいい」

「そうね。私とあなたなら、どちらが適しているかしら。ジェイル、パソコンへの打ち込みは早い方？」

「ああ」

「……………そしたら、お願いしてもいい…………？　実は私、そこまで自信がないの」

「わかった。たぶんすぐできあがる。できたらまた連絡する」

「ええ、お願い。何か問題があったら、遠慮なく言ってね」

「ああ、わかった」

しかし、それからしばらくたって、ジェイルからの連絡はこなかった。

すぐできると言ったのに、もう×切は明日である。

さすがにまずいとアイリスは思い、ジェイルに電話をした。

——はい。

すると、聞き覚えのある声が電話口に出た。

しかし、どこか元気がないようにも聞こえる。

「ジェイル？　どうしたの？　課題の×切明日なんだけど。できてるの？」

「あ……………ああ……………その……………すまない……………実は、今……………やってるんだ」

「ええ?!」

アイリスは驚きで思わず電話を握り、大声で叫んでしまった。

「今、ジェイルどこ? 自分の部屋?」

その声は低く落ちる。

「そうだ」

ジェイルは気まずいのか、小さい声で答えた。

「じゃあ、私今すぐ行くから」

「え、おい、待て……!」

アイリスはジェイルの言葉は聞かずに、電話を切り、男子寮に向かった。

awaking after sleeping 【2】

男子寮に入るアイリスを、その場にいる男子達は物珍しげに見ていた。

だが、アイリスはそれに構うことなく、力強い足取りで進んでいく。

そして、ジェイルの部屋の前で止まった。

一応、一呼吸置いて、ノックをした。

何かを抑えているかのように、その音も重く聞こえた。

「どうぞ」

ジェイルの声が聞こえた。

アイリスが開けると、薄暗い部屋の中で、ジェイルが部屋のパソコンに向かっていた。

アイリスを見た目は、隈ができていて、いつにも増して目つきが悪かった。

「何、ジェイル、どうしたの？」

アイリスはそんなジェイルの姿に驚き、心配そうに近寄った。

「悪い……その……あの間に他の課題も課せられてしまって、論文も進めていたら、お前との課題を進めるのを……忘れていたんだ。」

……本当にすまない。だが、今やっている。今日中にはできるから、明日の授業までにはお前に確認してもらえるようにするから」

「そんなこと言ってられないわよ。私も今日徹夜であなたの所にいるわ。私、~~メ~~切ギリギリって嫌いな。一刻も早く完成させたいの」

アイリスは、少し刺々しく言った。

「悪い……」

ジェイルはアイリスに視線を合わせず、ますます落ち込んだ声を出した。

アイリスもさすがにジェイルが可哀相になった。

「どうしたの？ ジェイル。あなたこんないい加減なことをする人じ

やないと思つてたけど。そんなに課題があつたの？　あなたが処理しきれないほどの課題なんて……」

アイリスが少し落とした声音でそう言っている途中に、ふと彼女はジェイルの側にあるものに気づいた。

そして、それを手に取る。

様式からして、簡単なレポートではあるが、その表紙に書かれているのは彼の名前ではなかった。

よく見ると、ジェイルの名前でないレポートなどがパソコンや、ベッドにまで、どうすればこれほど集まるのかと思われるほど、積みまれている。

「ジェイル、あなた、何これ」

アイリスは手に持っているレポートを握りつぶした気持ちになつていたが、そこは抑えた。

「ああ……　本当はお前との課題を優先させるべきだつたんだろが、この時期は課題が重なるみたいで、頼まれてしまったんだ」

「つまり、人のレポートね？　また代わりにやってあげたのね？」

「お前との課題は協力するというルールだからしたが、その他は俺のやり方でやっているからな」

「あなた！　本当に私が何であるの時怒つたのか、わかってないようね！？」

アイリスは、寮中に響くかと思うほどの大声を發した。

その声はややヒステリックな高音でもあった。

ジェイルは思わず顔をしかめた。

そして、思わずアイリスを振り返った。

アイリスは、声は怒っているが、その表情は今にも泣きそうに、目は充血し、何かをこらえるように歪んでいた。

ジェイルは、そのような表情を見たことがないのか、アイリスの顔をまじまじと見つめ、固まってしまっていた。

しばらくアイリスとジェイルは見詰め合ったままだったが、アイリスが全て吐き出すように、大きく息を吐いて、視線はとかれた。

「今、そんなこと言ってもしょうがないわね。作業を進めましょ
う」

「あ……ああ……」

ジェイルはそれでまた作業に戻った。

ジェイルは文字を打ちながら、考えている文章を声に発し、アイリスはそれを聞いて、画面の文字も見ながら、文章を確認していく。途中でルームメイトが入ってきたが、二人がいるのを見ると、自分とは別なヤツの所で今日は寝るから、と去っていった。

何か妙に嬉しそうだだったが、アイリスにはそれを気にしている余裕はなかった。

作業は深夜に及んだ。しかし、そこまで粘ったおかげで、文章は全て書き終えることができた。

「終わったわね……」

アイリスはほっとしたように、やっと息をついた。

気づいたら、思わずジェイルの肩を強く掴んでいた。

「これができれば、後は大丈夫でしょう。ジェイル、疲れただろうから、プレゼン用のスライドは明日朝一にすることにして、今日は……」

アイリスが最後まで言わないところで、ジェイルの首は急にかしげた。

アイリスは驚いてジェイルの顔を覗き込むと、彼は静かな寝息をたてていた。

緊張の糸がきれて、一気に眠気が襲ってきたようだ。

「……………」

アイリスは、思わず笑みがこぼれた。

しかし、このまま放っておくわけにもいかない。

部屋を見回して、ジェイルのベッドから毛布を取り出した。

そして、とりあえずそれをジェイルの背中から静かにかけた。

アイリスは、ジェイルのルームメイトのベッドを借りて仮眠をとることにした。

それからまた何時間かして、空が白み始めた頃。

ジェイルは気づき、勢いよく首を持ち上げた。

その拍子に、かけられていた毛布が落ちた。

ジェイルは、不思議そうに毛布を持ち上げて、まじまじと見た。

別に自分がいつも使っている毛布だが、いつかけられたのか全く覚えていなかった。

恐らくかけたのはアイリスだと思われる。

そのアイリスはどこだ、とジェイルは部屋を見回した。

すると、ルームメイトのベッドが少し膨れているのが見え、近づいて覗くと、アイリスが横になって、ほとんど聞こえないような静かな息をしていた。眠っているようだ。

ジェイルは、またアイリスと持っている毛布を交互に見比べる。

しばらくそれを繰り返すと、毛布を自分のベッドに戻し、またパソコンの前の向かい、今度はプレゼン用のスライドを作り始めた。

アイリスは太陽が完全に昇りきり、結構高いところになった時間に目覚めた。

慌てて飛び起きると、ジェイルはパソコンに向かいながら、コーヒーを飲んでいた。

起きた気配に気づいたのか、アイリスの方を見る。

「ジェイル、ごめんなさい、私寝てしまっていたのね」

「いや、よく眠れたか？」

「え、ええ、それは大丈夫だけど……プレゼンのスライド……」

「ああ、できてる。あとはお前が確認してくれればいい。レポートも印刷して綴じたから大丈夫だ。あとは、時間どおりに授業に行くだけだ。まだその授業までは時間があるから、大丈夫だぞ。あとは、お前に今日他に授業があれば、別だが」

「あ、そう……。もう、今日の授業はいいわ。たぶん大丈夫。そして、今確認する。スライド、見せてもらっていい？」

「ああ」

ジェイルはコーヒークップを持ち、パソコンの前から移動した。アイリスは画面を覗き込み、マウスを動かしながら、スライドを確認していく。

飾り気がなく、事務的ではあるが、しっかりポイントが押さえられていて、色使いもうざつたくない見やすいものだった。

「完璧よ。本当、ありがとう、ジェイル。お疲れ様」

アイリスはそつとジェイルの頭を撫でていた。

ジェイルは意外な行動をされたのか、少しアイリスから視線をそらして、どうしたらいいのか迷っているようだった。

「……いや、元々は俺が無責任なことをしたからだ。お前に面倒をかけて申し訳なかった」

「もう、いいけどね。でも、レポート受けるのは程ほどにしといてね」

「もう少し、考えるようにする」

アイリスは、あえてレポートの代理を受けるな、とは言わなかった。

ジェイルはそれで大学生活をうまく乗り切っているのだから、自分の言うことじゃない。

でも、アイリスはそれをどこか寂しく思っていた。

「あのね、ジェイル、こういうペアワークとかじゃなくても、私になら、頼ってもいいからね。何か困ったことがあったら、いつでも言ってね。できることなら、手伝うから。手伝わせて、ね」

アイリスは、ジェイルの頭をなでながら、顔を近づけて、優しい声で言った。

ジェイルは一瞬を目を見開いてアイリスを見た。

そして次の瞬間、今度はアイリスが目を疑った。

「ああ、ありがとう」

ジェイルは頬を染めて、嬉しそうに笑っていた。

awaking after sleeping 【3】

授業も無事に終わった後。

「あ、ジェイル、隈取れたね」

そう言うと、アイリスはジェイルの顔を両手で挟み、顔を近づけてジェイルの目を見た。

ジェイルは驚いたように、慌ててアイリスの手を力強く振り払った。

アイリスも驚いて、少しジェイルから離れて、ジェイルの顔を目を大きくして見ていた。

「ど、どうしたの……？」

「あ……」

ジェイルも戸惑ったように、自分の手とアイリスを交互に見る。

「大丈夫？」

「あ、ああ……何でもない。それじゃあな」

ジェイルは慌ててノートなどを抱えると、逃げるように教室を出て行った。

アイリスは、怪訝そうな顔で首をかしげ、走り去ったジェイルを見ていた。

さらに終了後オマケ。

話を終えたアイリスとレイラ。

「あの頃のジェイルはかわいかったなー」

アイリスは夢を見るように、目をつぶって言った。

「その笑顔、見たいような見たくないような……」

レイラは苦笑いを浮かべて、視線を宙に彷徨わせていた。明らかに気持ち悪い、と顔に出ていた。

「あ、ジェイルおかえりー」

アイリスが居間の入り口を見て言った。

「ああ。何だ、また来ていたのか」

すると、ジェイルが入ってくるどころだった。

そして、レイラの姿を見ると、そう付け加えた。

「何よ。アイリスが一人で寂しいところにいたんだからいいでしょ」

「別にすぐ戻ってくるつもりだったさ」

「ああ、そうですか。本当、今じゃ、かわいいのかの字もないね」

「何だ？」

「別に何でもないよ」

「ジェイル」

アイリスがその会話の切れ目に声をかけた。

「？」

ジェイルは買い物をしてきたものをキッチンに置くと、アイリスを見た。

「笑ってみて」

「は？」

「笑って」

アイリスが笑顔で言う。

「なぜ笑う必要があるんだ」

「何、私の前じゃ笑えないってどういうの？」

アイリスが悲しげな顔をする。

「いや、そういうことじゃなくて、いきなり何を言い出すんだと驚いただけで……」

アイリスの表情に、ジェイルは途端にしどろもどろになった。

「アイリス、やめなさい。今のこいつには無理無理」

「あー、残念。やっぱり年月は人を変えるのね」

「だから、何なんだ？」

ジェイルはますます訳がわからず、眉を寄せるばかりだった。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
7
/
1
0
/
1
4
*
*
*

文化的生活

「あら、ジェイル、何か買ってきたの？」

ジェイルが片手に袋を持って歩いている姿を見かけて、アイリスは声をかけた。

ジェイルもアイリスの声に立ち止まり、声の方向を向いた。

そして、アイリスの姿を見とめる。

「ああ、アイリスか。いや、借りてきたんだ。映画のビデオとCDを」

「……………」

「何だ」

アイリスが驚いたように目をみはるので、ジェイルはやや不機嫌に顔を歪めた。

「いや、意外だなーと思って」

「そうか？」

「いつも論文ばかり書いてるから、化学のこと以外興味ないと思ってた」

「まあ、あえて定義づけるなら、知識が増えることが好きなんだ。映画や音楽からも学べることはある」

「結構文化的なのね」

「見ることは好きなんだ」

「だから頭でつかちなのよ」

「……………」

ジェイルがじとりと睨むと、アイリスはくすりと笑った。

「ごめんなさい。ねえ、一緒に見てもいい？」

「いいが……あまり一緒に見るような映画でもないぞ？」

「え、どういうの？」

「死霊の内臓、悪魔を哀れむ歌、エメリー・ローズ、だな」

「何でそんな微妙に時期もジャンルも違う怖そうな映画ばかり…」

…」

「今日はそういう気分だったんだ。だから、俺は知識を増やしたいだけと言っただろう。種類は関係ないんだ。こないだは、まだおとなしく見られそうな映画だったんだがな」

「そんなに頻繁に借りてるの？」

「月に一、二回ぐらいか。論文との兼ね合いもあるから」

「いいわよ。言い出したからには一緒に見させて」

「そうか。別に俺は構わんが。もしかしたらもう一人いるかもしれないが、いいか？」

「あ、ルームメイトの人？」

「そうだ」

「向こうが気にしなければ、私は問題ないわ」

「そうか」

そして、部屋に入る二人。

部屋には、ルームメイトがすっかり待っていた。

「おお、ジェイル、借りてきたかー。って、何だよ。お連れさん一緒かよ」

「偶然そこで会ったんだ。見たいと言うから連れてきた。何か問題あるか？」

「何だよ。お前と彼女がいちゃいちゃしてるトコにいられるわけねえだろ。レンタルはまだ期間あるよな？ 俺後で見るわ。お前ら二人で見てるよ」

そう言つと、ルームメイトはさっさと部屋を出て行ってしまった。

「気を遣わせてしまったわね」

アイリスは、ドアが閉まるとジェイルに言った。

でも、どこか嬉しそうだ。

「よくわからん。ただ映画を見るだけなのに」

ジェイルは相変わらず無頓着だった。

しかしアイリスは、それには慣れていたので、大して気にならなかった。

「さて、何から見るかな」

「何かあなたのこだわりとかあるの？ 見る順番の」

「まあ、それもその時の気分だ。今回は三つだけだが、これがもつと量が多くなったら、精神の状態を維持できるよう、映画の雰囲気もそろえて見なければいけないからな。とりあえず、無難に、一番お前が気に入らなさそうな映画から見ていくか」

「何？」

「死霊の内臓」

「……………そうね」

ジェイルは部屋のビデオデッキにビデオを差し込んだ。
さつそく映画が始まる。

早々にアイリスは怖さにジェイルの腕をつかんでいた。

「怖かったら、無理して見ることはないんだぞ」

「だ、大丈夫よ…………」

「というか、そんなにくつつかれると気になって映画に集中できないんだが…………」

「う……………」

アイリスはだんだんとジェイルに近づいていた。

最初は腕をつかんでいるだけだったのに、今やジェイルの腕に自分の腕を絡めて、ジェイルの腕を両手で抱きしめている。

ジェイルはリモコンでビデオデッキとテレビの電源を落とした。

「どうした。何か話したいことがあるなら言え」

「何かなければ、一緒にいたいと言っではいけないの？」

「だからと言って、無理をして見たくもないものを見ることはないだろう」

「あなたがこういうものを見たり聞いたりしてるのか知りたいのよ。ジェイル、私このあいだはちゃんと言わなかったけど…………私、あなたのこと好きなの。大好き、大好きなの。だからあなたのこと知りたいの。あなたの側にいたい。あなたが何を好きで、何をよく見ている、何を考えていて、何を聞いていて、全て知りたいの。でき

るだけあなたと同じ時を過ごしたいの」

アイリスは、ジェイルの顔を両手で包み、自分の顔をジェイルの肩に置いた。

言葉の最後は、ジェイルの耳元に口を寄せ、だんだんささやくようになっていた。

アイリスの方が身長が大きいので、自然と覆いかぶさるようになっていた。

ジェイルはただ固まっているしかできなかった。

アイリスは口を閉じると、ジェイルを抱きしめ、顔をすり寄せた。しばらくその時間が流れ、とりあえずジェイルは何かしようとは思ったようだ。

「ア、アイリス……クラシック音楽は、好きか？　これなら、お前と一緒に聞けるかもしれない」

ジェイルは脇にあったレンタルの袋を寄せて、中からCDを探り出した。

アイリスはジェイルから離れて、ジェイルが手に持っている物を見た。

アイリスが離れた瞬間、ジェイルは少しほっとしたように息を小さくついた。

「誰の曲？」

「バッハだ。俺はゴルトベルク変奏曲が好きなんだ」

「そうなんだ。ピアノ曲だったよね、確か」

「知ってるのか？」

「家庭教師先の子が発表会で弾くって言ってたのを聞いたことがあるの」

「俺は眠れない時にこれをよく聴くんだ」

「聴かせて。あなたの好きな曲」

ジェイルの肩に手を置き、立ち膝をして、上から見下ろしていたアイリスが笑顔で言った。

「じゃあ、ちょっと動くぞ」

ジェイルは肩にあったアイリスの手を避けると、オーディオプレーヤーにCDを入れた。

静かなピアノの音が、部屋にじわりと広がっていった。

ジェイルは、しばらくオーディオの側にいて、CDを入れた姿勢のまま、目を細めていた。

アイリスは、その様子を黙って笑顔で見ていた。

【ということを思い出して、ジェイルさんがジューダスに愚痴る】

「アイリスは昔、好きだと言ってくれたのに、今は言わなくなっ
た」

ジェイルは唐突に話し出した。

「いや、だからどうした。ってかなんでお前ここにいるんだ。研究室別棟だろ。」

ジューダスは大画面のモニターの前にある椅子に座っていた。

今はモニターは背にして、カップに入ったコーヒーを飲んでいる。

「と、アイリスに言う前にお前で練習しようかと」

「やめてくれ。すげえ迷惑。っつーか、うざい」

「別に休憩時間だからいいじゃないか」

「だからって、何でわざわざ俺のところに来るんだよ」

「俺の研究室はいづらいから」

「……………」

【さらにつけ加えて。】

「ジェイルはこの曲が好きなの？」

背を向けているジェイルに、アイリスが聞いた。

「ああ、少し思い入れがあるんだ」

「聞いても、いい？」

「……ただ、聞いていると昔から落ち着いたってだけの話だ」

ジェイルの声がどこことなく沈んでいるのが、アイリスの気にかかった。

「そんなに好きなのに、アルバム借りてきたんだね」

何とか引き出そうと、話題を変えてみることにした。

「ああ、俺はこの曲で色々な弾き手のものを集めて、一つのCDにしてるんだ」

そう言うと、ジェイルはステレオの隣に何枚か重ねてあったCDの一枚をアイリスに見せた。

「弾き手によって、やっぱり違うものなんだ」

「ああ。それぞれの解釈の仕方が違うから、どれを聞いてもそれぞれ違っていて飽きない。これをずっとリピートをかけて聞いている」

「ピアノとか詳しいの？」

「俺が昔弾いてたんだ。これは本当に昔から好きで、これが弾きたくて練習していた時期もあった」

「ジェイル、ピアノ弾けるんだ!？」

アイリスは驚いたような声をあげた。

「まあな」

「タイピングも何だかうまいと思ったけど、ピアノやってたんだね」

「まあ、指を動かす作業は昔から好きだったからな」

「なんか手先器用そうだね」

「自信はある」

「今度、ピアノ聞かせてほしいな」

「機会があつたらな」

それから数日後。

アイリスはジェイルの部屋に向かっていた。

ジェイルの姿をここ最近ずっと見かけていないからだ。

ルームメイトを捕まえて聞いてみると、ジェイルはここ最近、ずっと起きていたかと思えば、しばらくの間眠って、部屋から出てこない時があるらしい。

アイリスは心配になって、ジェイルの様子を見るために、ルームメイトに鍵を貸してもらい、部屋に来た。

静かに扉を開けて、ジェイルのベッドの方を見る。

そこにはちゃんと、規則正しい静かな寝息をたてるジェイルが横になっていた。

近づくと、彼はヘッドホンをしていて、何かを聞いているようだった。

何を聞いているのか気になり、ヘッドホンとステレオのつなぎ部分を取る。

すると、ゴルトベルク変奏曲だった。

つなぎ部分を取って、音楽が途切れたせいか、ジェイルの息遣いが変わった。

アイリスはすぐそれを察知して、慌ててヘッドホンをつなぐ。

そして、ジェイルの側に寄った。

彼の顔をよく見ると、目尻から頬にかけて、湿った跡があった。

泣いていた。

息遣いはそのままに、ただただ涙だけが流れていた。

アイリスがその様子を黙って見ていると、突然ジェイルがアイリスの手首をつかんだ。

アイリスは驚いて、一瞬動けなくなった。

「行かないで」

普段のジェイルからは想像できないような、か細い声だった。さらにその手には力がこもっていく。

「行かないで、行かないで。置いていかないで……」

涙は次々に目から流れ、枕に落ちていく。

表情は切なげに歪んでいた。

アイリスの手首を握る手はますます力がこもる。

アイリスは少し痛み、眉に皺が寄る。

ジェイルの尋常でない様子に、とりあえず触れてみようと思っ彼の額に手を近づけた時、突然彼の目が大きく開いた。

「誰だ！ お前は！！」

そして、勢いよく飛び起きて、アイリスを怒鳴りつけた。

アイリスは驚いて、手を出したままジェイルを呆然と見つめた。

やがてジェイルも落ち着いてきて、だんだんと表情が元に戻っていく。

「……アイリス……か……」

それだけ言うと、またベッドに倒れこんで、目をつぶった。

アイリスの手首を握っていた手は、ほどかれていた。

RAN

2007/10/14

Something of a scientist

「そういえば、いつも論文書いてるみたいだけど、何のためにやってるの？」

アイリスがふと疑問に思ったことを口にした。

「お前はバイトしてるだろう？ 何のためにしてるんだ？」

「私は孤児院育ちだから、少しでもお金がないと困るのよ」

何を今更、と言ったように、アイリスは憮然として言った。

「だとすると、俺は、金に困らない家だから、ただ親の金を貪って、漫然と馬鹿のように生きていればいい、ということか？」

無表情で言ったものの、言葉には棘があった。

「そこまで思ってないわ」

アイリスも少し機嫌の悪い調子のまま、返す。

「なら、少しは思っているのだろう？」

「話をごまかさないで」

アイリスは強く言った。

「ごまかしてなどいない。俺はこの論文を書いて、懸賞論文に応募し、賞金をもらって生活している。授業料は払ってもらっているが、それも借りているだけだ。必ず返す」

ジェイルの言葉に、アイリスは彼を見つめて、一瞬黙った。

「……学問で生活するなんて、根っからの学者肌ね。あなたは」

そして、また視線を男からそらして言った。

その言葉は、どこか嬉しそうな、頼もしく思っような響きがあった。

「それは、誉め言葉だと思うことにする」

男は、手元にあったコーヒーを飲んだ。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
7
/
9
/
5
*
*
*

Strong Woman

ジェイルは、論文をまとめるのに徹夜した。

そして、その翌日の日曜。

今日は一日中、部屋で寝てみよう、と彼は決めていた。

だから、彼は朝から自分のベッドで静かな寝息をたてていた。

そこへ、ドアがゆっくりと開いた。

入ってきたのは、アイリスだった。

ジェイルのベッドにアイリスは静かに近づいた。

ジェイルは布団をかぶって眠っていた。

しばらくそれを眺めていたアイリスだったが、やがてジェイルの布団に潜り込んだ。

ふと違和感を感じて、ジェイルは目覚めた。

そして、違和感のした方を向く。

そこには、アイリスがいた。

ジェイルは驚いて、布団を勢いよく跳ね上げて起き上がった。

アイリスも、それに続いて起き上がる。

「あ、起きた？」

アイリスは悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「何で、アイリス……？」

ジェイルは激しく動揺して、うまく言葉が出せないようだ。

「論文終わったかと思って来てみた」

「……アイリス、俺は今日寝てたいんだ」

何とか自分を落ち着かせようと、大きく息を吸い込んでから、ジェイルはそう言った。

「うん、別にいいよ」

しかしアイリスは去る気配はない。

ジェイルは、困ったように顔を歪めた。

「いや、だから、人がいたら気になって眠れないんだが……」

「でも私、今日はジェイルの側にいたい」

「……………」

ジェイルは、嬉しいような苛立たしいような、何とも複雑な気分だった。

「何なら……………」

アイリスはジェイルに近づく。

「…………私が疲れを癒してあげようか？」

唇が触れるか触れない距離にまで、近寄る。

「……」

ジェイルは驚いて、目を大きく見開き、口をぎゅっと結んだ。

「いい！ 知らない！ もう疲れは取れた！」

そして、首を大きく横に振る。

「いやあ、今度は私が引き下がれないわ」

アイリスは笑みを浮かべたまま、ジェイルの首に腕を絡める。

と、そこでドアノブが回る音がし、ドアが開いた。

入ってきたのは、ジェイルのルームメイトだった。

ジェイルとアイリス、そしてそのルームメイトは視線が思いつきり合う。

一瞬の沈黙が流れる。

「こりゃ失礼」

そして、ルームメイトは一瞬驚いた顔をしていたが、笑顔に変わり、ドアを閉めようとする。

「待て！ 違うんだ！」

ジェイルは慌てて、それを止めようとした。

「ちよつとごめんね」

しかし、アイリスはそれを促すように手を振る。

「はいはい。じゃあ、頑張れよー」

そう言つて、ルームメイトは去つていった。
ドアが完全に閉まると、また沈黙が流れる。

「さあ、ジェイル……」

アイリスはまたジェイルに顔を近づけた。

「待て、アイリス、話し合えばわかるはずだ……」

「大丈夫だから」

アイリスは変わらず笑顔だ。

だが、ジェイルにはその笑顔から、逆に恐怖感を感じた。

「うわぁー！」

ジェイルの叫び声は途中で止められた。

「で、その後どうしたの」

レイラがお茶を一口、口に含んで飲み下してから聞いた。

「おいしく頂きました」

「……」

「まあ、これには語弊があるけど。ジェイルは大学時代は本当に何もしないんだもん。だから私は大学時代ずっとマリアのように純潔を保ったわけですが。鬱憤がたまつてたので、ひたすらジェイルをいじって反応を見て楽しみました」

「意外とアイリスって……」

笑顔で語るアイリスに、レイラは苦笑いを浮かべて、また紅茶を飲んだ。

その後の言葉は、自分の胸の中だけに留めることにした。

「でも、今はジェイルは攻めるようになったけどね。噛み付いたり殴ったり。進歩したよ」

「……あんたらカップルよくわからんわ」

レイラは紅茶に手を伸ばす気にもならず、その水面を見ていた。

「アイリス、お喋りが過ぎるぞ」

キッチンからジェイルが言う。

彼は今、午後のお茶用の菓子を作っていた。

「何？ また私に悪戯されたいの？」

「……………」

アイリスの笑顔の一言に、ジェイルはまた黙った。

ごまかすように、オーブンへ視線を向けた。

「しかし、抵抗しなかったってことはまんざらでもなかったってことだね」

「……………」

レイラの一言にも、ジェイルは何も返さなかった。返せなかった。きれいに焼き上がったマフィンを、恨めしげに見ていることしかできなかった。

そして、何も言わずにマフィンを彼女達の前に出す。

「おいしそー」

女性二人は、嬉しそうにマフィンを手に取った。

あんな話の後によく食えるな、とジェイルは思った。

RAN ***2007/9/5***

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5767x/>

trip in the world ~ Before the days ~

2011年11月18日03時12分発行